二世探偵の断罪

尾田榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二世探偵の断罪

【Ｎコード】
Ｎ３１４８Ｒ

【作者名】
尾田榊

【あらすじ】
「最高傑作」と評される、現実の名探偵四西基音――その娘である四西意音は、才能こそあるものの、極度の口下手のせいで依頼を受けることすらままならない残念な二世探偵。そんな彼女の世話をやく高校生・桜庭真人のクラスメートが、ある日突然殺害される。被害者の恋人から依頼された意音と真人は、犯人をつきとめようとするのだが…。

序章（前書き）

はじめまして。尾田といいます。
未熟な点がある話ですが、少しでも面白いと思って頂けたらなぁと思って書いております。
どうぞよろしく。

序章

0

――今聞いたことは、誰にも話してはいけない。

あの人はそう言うと、ゆっくりとした動作で屈み込み、視線を僕に合わせた。冴々とした広がりを持つ瞳が僕を捕らえる。今まで気付かなかったが、あの人の目は不思議な色をしていた。どこまでも澄んでいるのに不気味。黒々とした闇のような水面の――波紋１つ立てない、生物の住まない世界。あの人はそれを内包していたのだと、僕はここで初めて気が付いた。。

――加えて、君自身も覚えていてはならない。

あの人の言葉は鼓膜に届くが心に届かなかった。感情が篭っていないからだ。その声は音だった。あの人はその時単音を話していた。やけにとぎれとぎれの声音。滑らかな滑舌はあの人の特徴だったはずなのに。しかしその分、いつもより記憶には届いた。覚えていてはならない、と僕は繰り返した。あの人は頷く。

――覚えていてはならない。忘れなければならない。君なら出来るよね。

それは疑問でも確認でもなく、だからといって強制でもなく。あの人は当たり前のことを言っているだけの響きを僕にぶつける。僕はただ、覚えていてはならないという言葉をもう１度口の中で転がした。オボエテイテハナラナイ。

僕は、それを記憶してはいけない。

――君にしか頼めない。君が砦なんだよ。

あの人の手が不意に僕の視界を塞いだ。顔が見えなくなって、暗闇が視界を覆う。あの人の手は冷たい。まるで陶器のように冷たい。僕はその冷たさに呼応するように首を縦に振った。

分かった、と、僕は声に出した。

――ありがとう。これであの子は大丈夫だろう…。
――君にはひょっとして危険が迫るかもしれない。しかしその時は僕が帰ってくるから安心してくれ。
――君はあの子を守り、僕は君を守り、あの子は僕を守る。
　起伏の無い宣言。淡々としたそれは耳にも冷たい。僕はどうしたのだろうとようやく不思議に思った。あまりにも、あの人らしからぬ話し方であった。しかし僕は同時に心のどこか一部片隅で――或は僅かではあるが確かに心の中心で、あぁやっぱり、という言葉を漂わせていた。やっぱりこの人は、こういう人だったのだと、そう納得していた。何故ならその日のあの人は、とんでもなくらしくないことこそ自分らしいとでも言うかのように、見たこともない程素直な顔をしていたからだ。
　忘れろ、とあの人は繰り返した。
――僕の言葉を忘れろ。僕の君への関与を忘れられれば尚いい。僕のこと自体も忘れてくれるなら更にいい。
――僕に関する記憶は徹底的に削除するんだ。いいね？
　僕は頷いた。実際、僕ならその程度のことは簡単だった。
　だからこそあの人も、僕に言葉を預けたのだろう。
――よし。
　小さく呟かれた言葉と同時に手の平が離れた。視界に光が入り込んできて、一瞬だけ何も見えない状態になる。すぐに回復した視界の中で、あの人は屈んでいた体勢を解いて立ち上がっていた。
――じゃあ、僕は行かなくちゃ。
　あの人はそう言うと、今度は右手を僕の頭に置いた。ぽす、と間抜けな音が、その時のあの人には不似合いだった。
――最後に、君にキーワードを上げよう。
――万が一の場合。もしもやむを得ない場合。どうしてもこれを思い出さなければいけない場合。そんな時が起こらないことを願うけど、しかし起こらないと言い切ることは出来ないからね。
――保険だ。

あの人はつぃ、と視線を上方へスライドさせて、目を細めて続けた。
――いいかい。
――キーワードは、
――『＊＊＊＊＊＊＊』。

覚えていてはいけないけれど、忘れてはいけないよ、と、あの人はそう言った。

第1章　二世探偵と僕・1

大島梨伊沙という僕のクラスメートについて、とりあえず説明したいと思う。

黒髪のボフカット。髪質はいいのか動く度にさらさらと毛先が揺れるのが可愛らしい。身長は１６０？くらいだが、細身なので小柄に見える。バレー部所属。だからかよく「背が高くなりたいよー」と言っているのを目撃した。二重の丸い瞳が小動物を思わせる、決して飛び抜けた美少女ではなくとも、人を引き付ける確かな魅力をもった僕のクラスメートだ。

人気者、という言葉がよく当て嵌まる。

彼女は差別とか偏見とか、そういった言葉にまるで縁が無いような性格をしている。目立つ部類ではない僕のような男子が何回も話したことがあるということからそれは読み取れるだろう。たまにそんな彼女を「偽善者」と呼ぶ人もいなくはなかったけれど、話し掛けられれば大体その悪口は消滅した。気さくな、というか、誰とでも仲良くなれるなどというプロフィールを地で行くのが大島さんだった。

僕はだから、ひょっとしたら不相応にも彼女に憧れていたのかもしれない。

彼女を尊敬していたのかもしれない。

今から話すのは、そんな話だ。

G県・池山町。

山が近く川が交差する、しかし人口は多く買い物に困る程僻地ではない、そんな実に中途半端な田舎町に僕は住んでいる。

特産物はお茶、それに釜ヶ谷という渓流に沿う桜並木が県文化財に指定されている程見事。一応小さいながら温泉もあることから、割と県外の人も訪れる、個人的には住みやすい町だ。

お茶、桜。

池山町にはもう1つ、有名な事柄がある。

名探偵・四西基音――というのが、それだ。

「最初で最後で最上の名探偵」「唯一の本物」。「死にしキオン」という通称は、まるで死んだ者の声を聞けるかのように真相を言い当てることから命名されたと言われている。謎を謎をもって解き、1番の謎は彼自身だと犯人をもって言わしめる、「最高傑作」四西基音――彼が世に蔓延る幾人もの「名探偵」達と違う唯一の点、それは彼が現実の人間だということである。

リアルの本物。

紛れも無い、地球人。

彼は本の世界の住人ではない。ここ、この現実に確実に存在する――或は存在して「いた」、正真正銘本物の人間なのだった。

その種のマニアには高い人気を誇るそんな四西基音、そんな彼の開いていた四西探偵事務所がここ・池山町にあるのだ。

とはいえ、そのことを知る者は意外と少ない。活躍が取り沙汰されるのは彼の事務所に持ち込まれた事件より、警察の要請を受けて動いた事件ばかりだからである。加えて、その事務所がそんな名探偵の事務所には見えないくらい地味だからということもあるかもしれない。

池山町の中心部・矢幡。

池山町にある田舎町にしては大きな食料品店の道路を挟んで真向かい、どこにでもありそうな長方体の形をした、薄汚れた白いビルディング、その1階――それこそが希代の名探偵四西基音が初代所長を勤めていた、四西探偵事務所である。

看板は出ていない。錆びた螺旋階段が、特徴と言えば特徴か。

ちなみに、中の部屋の内装も簡素だ。西側の扉から入ったらそ

こが応接間になっている。フローリングの床、北側の窓の前に所長デスク、中心には一対のソファーが間に黒塗りの机を置いて向き合っている。
小綺麗にしてあるためか、胡散臭い探偵事務所などという場所にしては割と清潔そうだが、どこにでもありそうな事務所という印象が拭えない。
そんな四西探偵事務所、その北側のデスク、つまり所長席に――今現在（物理的な意味でも地位的な意味でも）座っているのは、その冗談のような名探偵、ではなく。
ツインテールの少女であった。
ツインテールの美少女で、あった。
「…ふふ」
窓の方を見ていたそのツインテール少女は、不意にくるりと椅子ごと体を回してデスクに肘をつき、手を組んでみせた。
漆を塗ったように艶やかな黒髪である。それを赤いリボンでツインテールにしているだけあって、顔立ちはかなり幼い。輪郭はまだ丸みを含んでいる。黒目がちな大きな瞳に、笑みを浮かべた口元が愛らしい。しみや雀斑が１つもない肌は赤味がさしていて実に健康的だ。中学生、下手すれば小学生にも見られかねないような風貌だが、着用しているのはスカートスタイルの黒いスーツだった（激しく似合わない）。
少女はにこりと、笑みの範囲を広げてみせる。
「ようこそ、四西探偵事務所へ」
…と。
そこまでの動きを確認し切った僕は、意音に向かって軽く手を叩いてみせた。
「オッケー。やれば出来るじゃん」
「……」
言われた意音は笑みを崩すと、何かが気に喰わないかのように唇を尖らせた。組んでいた手を解除して、どさ、と背もたれにもた

れる。
「これくらい出来るわ。問題は本当にお客が来たときなんだから」
「とは言えこれを繰り返して体に覚えさせるくらいしかないだろう」
「…むぅ」
　尤もだと思ったのか、意音は不機嫌そうに黙り込んだ。僕は肩を竦める。
「早いとこ接客出来るようになってくれないと、僕もそろそろ虚しくなってきゃうぜ？一体何回やってるんだよ、この訓練」
「ふん。何よ偉そうに。もう少し効果のある練習を考えなさいよ」
「いや、もうひと通りやっちゃったんだから仕方ないさ。後はもう意音が変わるのをまつばかりだ」
「こういう話を知ってるかしら。人に変わるのを望むより、自分が変わる方が簡単に世界を変えられる。そうつまり、私が変わるより貴方が変わった方がいいのよ」
「それ、僕視点から言ったら意音が変わったほうがいいってことだよな」
「自分を世界の視点に据えるなんて貴方何様なの？」
「お前がな！」
　というか僕が変わっても意音の接客下手は何も変わらない。
「じゃあ、依頼人が変われればいいんじゃないかしら？」
「さもいいこと思い付いたみたいな顔で何を言ってるんだ」
「ふん」
　鼻を鳴らして意音はそっぽを向いた。
「…やれやれ」
　僕は溜息をつく。
　ちなみにこの高飛車なツインテールスーツ幼女、年齢は１８歳だ。
　精神年齢は５歳くらいだけど。
　若いのは見かけだけで十分だろうに。
「何か失礼なこと思ってない？」

「気のせいだろ」
彼女の名前は四西意音。
四西探偵事務所二代目所長。
四西探偵事務所を引き継いだ――正確に言うならば引き継がされた、名探偵四西基音、「死にしキオン」その一人娘である。
実年齢１８歳、見かけ年齢１２歳、精神年齢５歳というプロフィールは、流石は変わり種名探偵の娘といったところか。
ついでに僕の名前は桜庭真人。
名探偵とは何の関係もない、極めて普通の高校２年生だ。
「大体」
意音はくるくると椅子を回しながら不本意そうな口調で言った。拗ねている子供にしか見えないのはまぁご愛嬌。
「貴方が接客すればいいでしょう。問題無いじゃない」
「問題あるからやってんの。僕は高校だからな。いつもここにいるわけじゃないし。今までだってそれで何回も依頼取付失敗してんじゃんか」
「いない貴方がいけないのよ」
「さっきから本当に上からだな…」
「掴みは大事よ。キャラ付けは始めは少し大袈裟にやっておくくらいがいいの」
「キャラ付けって言った！」
「少なくとも」
意音はいつも通り会話をばっさり切った。
容赦ねぇなぁ。
「しばらくは大丈夫でしょう。現に貴方、昼下がりの今ここにいるじゃないの」
「ん…まぁ、あとしばらくはな」
僕はちらり、と２階の方を見た。２階は意音の生活スペースになっていて、先程まで僕はそこで事務所を閉めて意音と共にテレビを見ていたのだ。

普段はあまり見ない、ニュース番組ばかりを追い掛けて。
チャンネルを回しつつ。
「…けどいつまでも続くわけじゃないし。せいぜい後3日くらいだろ」
「じゃあ、3日はいいわけね」
「それは駄目人間の考え方だ」
「プラス思考って言って頂戴？」
ふ、と意音はシニカルな笑みを浮かべた。スーツと共に激似合わない。キャラ付けなんかしなくたって、十分その幼女容姿でキャラ立ちするだろう。
「…それに、この隙にいっぱい依頼を受けるぜーみたいなテンションの休みではないからな」
「ま…それはそうね」
珍しく素直な意音の同意を聞き流しながら僕は窓の外に目を向けた。潔いくらいに澄んだ青空が広がるいい天気だ。5月の陽気をうららかに具体化しているような快晴に、少しだけ目を細める。
5月17日、火曜日、午後2時47分。
平日の真っ昼間に学校へも行かず、この高飛車な二世探偵と冗談混じりの雑談を交わしている状態の直接の原因――4月にクラスメートになったばかりだった大島梨伊沙殺害事件の一報が入った5月13日の金曜日から、4日がたとうとしていた。

二世探偵と僕・2

『G県池山町で、女子高生が殺害されているのが見つかりました。5月13日午後5時10分頃、人が倒れていると近くの住人が通報、警察が駆け付けた所、私立相光高校の女子生徒を発見。その後の調べで、同高校2年生の大島梨伊沙さんだということが分かりました。大島さんは腹をカッターで刺されており、警察は何者かが大島さんを刺して逃走したものと見て、詳細を調べています――』

「大島梨伊沙…どんな子だったの？」

僕との言い争いに飽きたのか、意音は暇潰しの雰囲気を隠そうともせず首を傾げた。他人事だな、と言うと、だってそうでしょ、と冷めた返事が帰ってきた。それはそうだ。知り合いでもない人に本気で哀れみを抱く人間のほうが珍しいだろう。珍しいというか、そんな人気持ち悪い。だがそうだとしても、それを表に出してしまうのはどうなのかなぁと思わなくもない。

「どんな子って…まぁ、いい子だよ。いい子だったよ、というべきかは分からんけど」

「いい子？」

「あぁ。人気者って感じ。溌剌としてて、明るくて、ついでに可愛い、みたいな」

「そんな人間漫画の中だけだと思ってたわ」

「お前との共通点はロリ容姿ってことだけだな。まぁ大島さんはお前程ではなかったけど」

「絞め殺されるか捩殺されるか好きな方を選びなさい」

「捩殺すって何だ」

絞め殺されるのとどう違うのだろうか。

「…つか、殺された人の話してるときに冗談でもそんなこと言うなよな」
「だって他人事だもの」
「はっきり言うなぁ」
「父さんが言ってたわ。探偵っていうのは心の冷たい人間ではないといけないんですって」
「ふーん？殺された人を直視出来ないからか？」
「違うわ」
うっすらと、意音は笑みを張り付けた。
「犯人に同情してしまうからよ」
「……」
「人は人を殺さないのよ、まひと。たまに心の芯まで真っ黒な人がいるけど、それはごくわずか。人が人を殺すには、よっぽどの何かがないと駄目なの。その一線を越えるような何かをした被害者に犯人が恨みを持つのも仕方ない、そう思ってしまったら探偵は負けなんですって」
「…まぁ、名探偵が言いそうな暴論ではあるな」
「父さんは正解しか言わない」
意音は不愉快そうに鼻を鳴らした。
「父さんはそういう人よ。あぁ、これはそういう人だったというべきではないことがはっきりしてるわね」
「…親父さん、行方不明になって何年だっけ？」
「今年で5年目よ。貴方と会う2年前だから」
「そうか…」
希代の名探偵、四西基音。
意音の父親でもあるその人は今現在、失踪中なのである。
意音いわく、何の前触れもなかったらしい――ある日朝起きたら、いなくなっていたそうだ。
煙のように消え失せていた。
予感もなにもなく、名探偵はいなくなった。

人が人だけにだいぶ大掛かりな捜査が行われたが、行方はまったく掴めていない。僕も何度かネットで検索してみたが、どうやら脱獄した過去警察に突き出した凶悪犯に殺されたのではないかというのが通説になっているようだ。
意音は、否定するけれど。
「5年…か」
しかし僕もそうではないのかという気がしている。どう考えたって尋常じゃない。こんな生活能力の低い娘を1人にして置いて蒸発するなんて、余程のことがない限り有り得ないだろう。自分で言うのも何だが、この事務所、僕がいないと経営していくのは不可能だぞ。
だって意音1人では、依頼が受けられないのだから。
「…後2年」
と、意音が呟くように言った。
「後2年で、父さんは死亡扱いになるわ」
「…あぁ…行方不明って、7年でそういうことになるんだっけか」
「絶対見つけてみせるわ」
意音はぎりぎりと奥歯を鳴らした。
「このまま事務所から逃げるなんて許さないんだから。絶対もう1度所長に戻して働かせてやる。私、そのために今所長をやっているのよ」
「…お前は親父さんが死んでるなんてちっとも信じないんだな」
「当たり前じゃない。父さんが死ぬ？そんなの天変地異が起こったって有り得ないわ。あんなしぶとくて異常なくらい頭の回る人が、死ぬはずがないもの」
「……」
こういう時、意音は強いな、と僕は思う。
強がりでなく意音は、名探偵の生存を信じ切っているのだ。
普通はできない。
…まぁ、或はそれを意音にさせている四西基音が普通でないパタ

ーンの可能性も、無きにしもあらずなんだけど。
「話がそれたわね」
意音は頭をかいて視線を下げた。少し照れているらしい。
「だから、その大島梨伊沙って子も、完璧な人気者ではなかったのよって、そういうことを言いたかったのよ」
「大島さんが嫌いな人なんて、聞いたことないけどな…」
「じゃあ殺されたことの説明がつかないでしょう」
「通り魔とか」
「不自然な点が2つあるわ。1つ、カッターで通り魔ってずいぶんその場の思い付きじゃない？」
「有り得なくはないだろ」
「じゃあ2つ。被害者だけ刺しているのはどうして？それこそ高校の前とかならともかく、あんな所で通り魔をするのは明らかに不自然よ」
「あんな所？」
「さっきニュースで地図出てたじゃない。あの辺りは人通りが少ないわ」
「そうか…」
「人気者って時点で敵がいないって可能性は皆無よ」
「何で？」
「貴方、逆恨みって言葉知ってる？」
「……」
「人気者を素直に認められる人なんて、稀よ。まぁ、さすがにだから殺すなんて人はいないから、何かきっかけはあったんでしょうけど、殺意を溜める理由としてはそれで十分じゃない？」
「…かもな」
僕は投げやりに頷いた。
大島さん…。
でもやっぱり、彼女に敵がいたなんて、思えないんだよな、僕。
誰にも嫌われていなかったとは言わない。多くの生徒に好かれて

たことは事実だけれど、多くの生徒に好かれているというそのことが、少数の生徒からの反感を招く。全員に好かれるなんて、土台無理な話なのだ。
だから、殺意を溜め込む段階まではわかる。意音の言うように、理由としてはそれで十分だからだ。
ただ――その後。
意音の言葉を借りるなら「きっかけ」。それが大島さんにあったことが、僕には納得出来ない。
だって、大島さんは。
優しかったのだから。
「…まぁ、私達があれこれ考えることではないわよね」
納得出来ない僕の表情を読み取ったのか、意音はそう言って肩をすくめた。
「そういうのは警察の仕事だから。私は探偵だから、依頼を貰うまでは動けないもの」
「ん？でも気になることは気になるのか？珍しいな」
「…まぁね。こんな近くで殺人事件が起きたのなんか初めてだし…」
けどまぁ、と意音は軽い調子で続ける。
「単純な事件みたいだし、すぐに解決するでしょう。せいぜいニュースで経緯を追うことにするわ」
「んー…、まぁ、そうだな。僕は同級生逮捕なんてことにならないことを祈るよ」
「可能性は零ではないけどね」
意音が僕の祈りを打ち砕こうとするようにそう言った時――不意に、ぴんぽーん、というやけに間延びした音が響いた。
「！」
びくっ、と意音が体を震わせる。と同時に、こんこんこん、と扉を叩く音も聞こえた。
「ま、まひと…お客さんかしら…？」
いきなり意音が弱々しい口調になった。しかしどちらかと言えば

意音の地はこっちなのだ。先程までの強気な調子は、本人の言う所の「キャラ作り」、だ。
「探偵がお客怖がってどうするんだよ」
「うう。まひと、出て頂戴…」
「いい加減慣れてくれねぇかなぁ…」
「む、無理。私、出ないからね」
「おいおい」
いつものことではあるのだけれど。
いつまでもお客を放っておくわけにいかないので、僕は立ち上がると、「今出ます！」と言いながら歩き、扉をあけた。
「いらっしゃいま、せ…」
「…ん？」
立っていたのは同い年くらいの男子だった。
短い髪は茶色っぽいが、黒もぱらついてるせいかあまり不真面目な印象は受けない。顔立ちは男前といって問題無いだろう。意志の強そうな瞳が印象深い。無地の白いTシャツに黒のチェックのパーカー、下は緩めのGパンというラフな格好をしていて、腰には青いウエストポーチが巻かれていた。
「…んん？」
相手は眉をひそめながら僕を見た。僕も声こそ出さなかったものの、同じような感じだっただろう。
同い年くらいの男子。
…というか。
「…佐藤君？」
「桜庭…だったっけ？」
同級生だった。
しかもクラスメートである。
そして僕はこの佐藤君を頭で認識した瞬間、どうやら意音と僕がニュースを追い掛けて成り行きを見守ることは無理になったらしいということも認識した。

何故なら。

この佐藤優一というクラスメートは学年で公認の大島さんの恋人である（だった、かな？）人物であり、また彼がここに来た理由など、このタイミングで大島さんの事件以外何も無いということを悟ったからである。

二世探偵と僕・3

「桜庭真人…だよな。何でお前がここにいるんだ？」
佐藤君は不思議そうに僕を見て、それから僕の横に張り付いて離れない意音を見た。意音といえば練習のかいもなく、ぶるぶると若干の奮えすら起こしながら、ソファーで僕の隣に座っている。ぴったりとくっついてくるものだから、暑いったらありゃしない。僕はロリコンじゃないから、意音にくっつかれても何も嬉しくない。いやまぁ、意音は年上なんだけど。
とりあえず、佐藤君の問いに僕はやんわりと首を傾げてみせた。
「まぁ…色々あって。2年くらい前から…か、この事務所の手伝いってか、コイツの助手みたいなこと、やってるんだ」
「へぇ…」
佐藤君は感心したように頷いた。そんにすごいことでもないんだけど。やってることは要するに、この高飛車なくせに人見知りの二世探偵の世話だからな。
僕は曖昧に笑いつつ、話題を佐藤君のほうに戻した。
「佐藤君こそどうしてこんな所に…いや、どうしてこんな所を、か。目的は大体分かってるつもりだけど、理由がイマイチ分からない」
「あぁ…」
佐藤君は俯いて腕を組んだ。
「俺、妹がいるんだけど、これがかなりのミステリマニアで。本物の名探偵が開いた事務所が町にあるって昔聞いたことがあったのを思い出して、まだあるかなと思ったから、何となく…まさかその女の子が、名探偵…なのか？」
「これはその娘なんだ」
僕は息をつきながら意音に視線をむけた。つられた佐藤君の視線に、更にびくっと体を動かす。
「…俺、なんか怖がられるようなことしたかな？」

「気にしないでくれ。意音は誰にでもこんな感じなんだ」
極度の口下手で、人見知り体質。
名探偵の娘のくせに、人前で推理披露なんてもってのほか、依頼を受けることすら誰かいないとままならない。
「ほら、意音。挨拶くらい、しとけよ」
「……」
ぶんぶんと意音は首を振り、恨めしげな目付きで僕を睨んで来た。無理という意志表示。
「…あー、悪い佐藤君。今その名探偵本人はちょっと…失踪中で」
「失踪？」
「依頼…しにきてくれたんだよな？大島さんの件…」
「……」
佐藤君は黙り、厳しい顔付きになった。表情に少し凄みが加わる。
「…まぁ、な」
「けど、何で？警察が調べているだろ？」
「……」
「えっと…コイツ、こんなんだけど、才能だけはちゃんと父親から引き継いでる。それは僕が保証する。何ならお金は成功報酬でもいい」
意音が抗議するように袖を引っ張ってきたが、僕は意音を睨み返して黙らせた。コイツ、これを逃したら今月の依頼また零になる可能性が上昇するってことを知らないのだろうか。四西基音の残していった貯金がかなりあるとはいえ、あんまり父さんのお金使いたくないって言っているのは意音本人だろうに。危機感が足りないんだよな…中途半端にお嬢さん気質なもんだから。ただでさえ意音の容姿を見て依頼を持って帰ってしまう人が多いというのに。
ペット捜しの依頼すら滅多に無いんだぜ、この事務所。
高校生の僕はともかく、四西探偵事務所二代目所長とか言って滅多に仕事を貰えず四西基音の貯金に頼っている意音なんか、世間から見たら今噂のニートにしかみえないだろう。

うーん、そろそろ誰か、大人を雇った方がいいのかなぁ。二代目所長の影武者みたいな人。表にその人に立ってもらって、意音は裏で活動するみたいな。

などと脇道にそれかけていた思考に気付き、僕は慌てて修正した。とりあえず今は佐藤君から依頼を取り付けることに集中しなければ。しかも珍しく、名探偵の事務所らしい仕事になりそうだし。

「ど…どうだろう、佐藤君」

「あ…あぁ…その、成功した場合、お金って幾らぐらい払えばいいんだ？」

「えっと…そうだな」

僕はソファーから立ち上がって（左腕に引っ付いていた意音も慌てたように立ち上がった）、デスクの引き出しから黒い電卓を出して、再び元の位置に座った。

「うちの料金システムは、何日契約かによって違ってくるから…とりあえずお試しで3日間契約するとして…」

うちの事務所の場合、例えば尾行ならば1時間1万円。それ以外だと1時間５０００円の計算で1日契約はすなわち6時間契約を意味するところとなるので、５０００×６＝３万。3日間契約するならばその3倍で9万。後、調査の段階で出た諸々の費用も負担してもらうことになるから、まぁ、１０万前後といったところになる。

さて、と僕はそうやって電卓を叩いていた指を止めた（ちなみに電卓を叩かなくたってこれくらいの計算は出来るが、その辺りは簡単に言えば演出である）。

ここからが問題…普通の大人ならばこの金額そのまま差し出す所だが、何せ相手は僕と同じ高校生…そんな金額をはいそうですかと了承するとは思えない。せめて万の位を一桁にし、これくらいならバイトで何とか、と思わせる必要がある。とはいえ出来るだけお金はとっておきたいから、あまり安くし過ぎてもよくない。その辺りの限界を見極める必要がある。

…本当は駄目なんだけどな、こういう勝手な割引。かなりアバウ

ト。
まぁ、学割ってことで。
と、隣から意音がいきなり手を伸ばし、ぱち、ぱち、ぱちと釦を弾くように押してみせた。１００００００と表示されていた数値が姿を変える。
『６５０００』
「……」
「……」
意音が小さく頷いた。
まぁ、そんなもんか。
「…学割で差し引いて、３日間でこんなものかな」
僕は電卓を机の上に滑らせた。
高い金額は予想していたのか、佐藤君は驚きこそしなかったものの、やはり厳しい表情のまま眉を寄せた。
「やっぱ…それくらいにはなるのか」
「一応、仕事だからな。これでも色々割り引いたんだが」
「３日間でか…３日間で、解決出来るのか？」
「それは何とも…だから成功報酬でいいって話。例えば３日間雇ってみたとして、それで解決出来たらこの金額を払ってくれればそれでいい。３日間経過した時点で解決出来なかったら、その時考えるのは契約を延長するかどうかだ。延長するならば僕は更にその延長期間分をプラスした料金を計算して佐藤君に出す。延長しないのだったら元の３日間分は払わなくていい。あ、ただし３日間で出した出費分だけは払ってくれ。こっちがマイナスになったら困るからな。で、延長した期間でも解決出来なかったら…あとはこれの繰り返し。最終的に意音が解決出来る前に第三者――例えば警察なんかが解決してしまったときは、解決出来なかった場合と同じでいい。…どう？だいぶ依頼者に優しい料金システムだと思うんだが」
「……」
「…佐藤君？」

佐藤君は何故か目をぱちぱちと瞬かせていた。声をかけるとはっとしたようになってから、決まり悪そうに口元を緩めた。
「あぁ、いや、悪い…なんか教室での桜庭と随分キャラが違ったから」
「え？そうか？」
「いやまぁ、気にしないでくれ。そうか、６万５千か…」
佐藤君はしばらく腕を組んで考え込んでいたようだったが、ふぅ、と息をつくと同時にそれを解き、軽く頷いてみせた。
「ま、それくらいならバイトすればなんとかなるだろ…じゃあとりあえず、３日間契約してみる」
「ありがとうございます」
僕はほっとして、それからちらりと意音のほうを見た。相変わらず佐藤君のほうを直視はできないみたいだが、それでもやはり依頼が取れてどことなく安堵しているような空気は伺える。
尤も、佐藤君からしたら何も変わらないだろうけど。
人見知りモードのときの意音の機嫌の機微を見分けるのには、経験とちょっとしたコツが必要なのだ。
「…で、佐藤君。その依頼っていうのは、さっきから大島さんの事件だって決め付けてたけど、それでいいのか？」
「あぁ…まぁ、そんなとこだ」
「…随分微妙な言い回しだな。っていうかこれもさっき聞いたけど、警察が動いているのに何でわざわざ？」
「……」
佐藤君は再び少し黙り、せっかく緩んだ表情を、再び硬いものに戻してしまった。
「…梨伊沙のためっていうのも、あるにはあるんだ」
やがて口を開いた佐藤君はそう言って、難しい顔のまま、でも、と続けた。
「自己中心で悪いんだが、そうじゃない理由のほうが大きい」
「そうじゃない理由？」

「あぁ…」
「というと？」
「それが…」
佐藤君は難しい顔を解いたが、次に浮かんできたのは困ったような表情だった。
「警察が、どうやら俺を疑っているらしいんだ」
「へ？」
「え？」
かなり珍しいことに意音までもが人前できょとんとした声を出した。佐藤君はそうなんだよ、と弱り切ったような声音で繰り返してみせる。
「俺、警察に疑われてるみたいなんだ。だから、真犯人を捕まえて、疑いを晴らしてくれないか」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3148r/

二世探偵の断罪

2011年10月8日19時46分発行